

【熊偉の略歴】

熊偉は中国大陸におけるハイデガー研究の先鞭をつけ、その土台を気づいた人物である。中国大陸におけるハイデガー研究は、熊偉からの「一線単伝」と称され、1987年に『存在と時間』の全訳がはじめて中国語で刊行（『存在与時間』）されるが、訳者は熊偉の弟子である陳嘉映と王慶節の二人で、熊偉は監修者として名を連ねている。熊偉は、1929年に北京大学の哲学系に入学、卒業後の33年にドイツに渡り、フライブルク大学に留学する。ハイデガーの名前を現地ではじめて知り、その講義にたちまち魅了される。熊偉は1941年に中国に帰国、いくつかの大学で哲学の教授を務め、1952年から北京大学に勤務し、多くの後進を育てることになる。まとまった著作は残さず、死後、弟子たちの手により、論文集『自由的真諦—熊偉文選』、熊偉によるハイデガーの翻訳を集めた『熊訳海德格爾』（2004）が刊行された。熊偉の翻訳は1960年代になされたものが中心で、ほとんどが市場には出回らない内部発行の書物に掲載されたものだった。

【同時代の東アジアにおけるハイデガー理解】

ハイデガーの講義には、1920年代に山内得立、九鬼周造、田辺元、務台理作らが参加したが、いずれも20年代のうちに日本に帰国しており、熊偉との接点はない。ハイデガーのもとで、『老子』の翻訳を手伝った蕭師毅（Paul Hsiao）は、1942年にハイデガーに初めて会っており、熊偉とは重ならない。熊偉はハイデガーと蕭との『老子』共訳には大きな関心は払っていたが、中華民国に渡った蕭と交流した形跡はない。

【ハイデガーのナチズム加担に対する評価】

熊偉は、ハイデガーが総長就任演説（5月）を行った年の10月にドイツに渡っており、当時の状況を間近で体験していた一人である。ハイデガーは「シュピーゲル対談」で、34年の夏学期の「論理学」以降の講義について、「聞く耳を持っていた人はみんな、これがナチズムとの対決であったということを聴き取りました」と語っているが、熊偉はハイデガーがナチと手を切ったという印象は持たなかったと述懐している。その後ナチから無用者扱いされたことなども含め、一連のハイデガーの態度について、熊偉は『存在と時間』の用語を用いて「沈淪（Verfallen）」と表現し、ハイデガーは閉ざされた限定的な世界に直面していたのではなく、全体としての世界に立ち向かい、自分の「天命」を敬い行動したものであるとしている。ハイデガー自身が述べるとおり、「転回」はあったとしても彼の哲学の本質は一貫して変わっていないと熊偉も考えており、哲学者としてのハイデガーを評価すべきであると述べている。

【ハイデガー、中国哲学、マルクス主義、自由】

熊偉は、最初期の論文「説、可説；不可説、不説」で、ハイデガーの現存在分析を利用しつつ、「我」とは実体ではなく、我が存在するからこそ我なのであり、我とは「存在」（Sein）

そのものであるとする。この存在する「我」は有でもあれば無でもあるとし、そこから語る
ことができるものでもあるし、語ることができないものでもある、と述べる。同論文では、
「無極而太極」という『太極図説』の言葉が盛んに利用され、法蔵（644-712）や莊子にも
言及されている。熊偉によるハイデガー理解は、中国の伝統思想との連関のもとで進められ
たと行ってよい。

1980年代になって、文化大革命時の沈黙を破り、熊偉は数編の論文を発表する。この晩
年の時期の論考において顕著なテーマとなるのがハイデガーにおける自由である。とはい
えこの自由の問題は、論文「説、可説；不可説、不説」で行った「我」とは何かについて
の分析とつながっている。熊偉によれば、真正の自己による決断こそが真正の自由なのであり、
この自由は「自らに由る」ということであって、「我」という存在の真理の本質なのである。
これは世界内存在という現存在のあり方とも関わっており、熊偉に言わせれば、ハイデガー
は「天人之際（天と人との関係）」について最も精密に考えた人物であった。こうした文脈
で理解された自由を、熊偉は「共産党宣言」の中の「個々人の自由な発展がすべての人の自
由な発展の条件である」という文章と結びつけ、個人の自由のためにすべての人の自由が抑
圧される資本主義社会が陥った方向も、個人の自由をけなしすべての人の自由も棚上げに
するソ連や東欧諸国の陥った方向も、誤っていると批判する。自由をこのように解釈するこ
とで、ハイデガー哲学とマルクス主義は両立可能であり、また孟子の「万物みな我に備わる、
身に反みて誠であれば、樂これより大なるはなし」や、莊子の「万物と我とは一たり」など
の思想とも通じるものとされるのである。